

民俗の衰退と表出

地方採石業者の経験した高度経済成長

Decline and Expression of Folklore : High Economic Growth
as Experienced by the Local Quarrying Industry

松田睦彦

MATSUDA Mutsuhiko

はじめに

①民俗学と高度経済成長

②「日本石材工業新聞」に見る戦後石材業界の動向

③採石業者の語る高度経済成長

④高度経済成長という経験

おわりに

【論文要旨】

小稿は、瀬戸内海の離島で採石業に従事することによって高度経済成長の好景気を享受した採石業者の経験をとおして、高度経済成長という現象と地方の民俗との間に設定されてきた固定的な関係性を乗り越え、変化と対峙する人びとの営みを民俗学の対象とすることを目的とする。

高度経済成長と民俗変化という関係性の中には、二つの問題が混在している。すなわち、一つは地域の過疎化の問題であり、もう一つは生活の近代化の問題である。この二つの問題が未整理のまま、高度経済成長という言葉には託されている。その背景には、調査対象としての地方の急激な変化への焦燥が看取される。昭和30年代後半から40年代初頭にはすでに民俗の変化は認識されており、その変化への対応として文化財保護の観点から文化庁主導の民俗調査が行なわれた。そして、時を同じくして、過疎が社会問題化し、過疎問題は民俗の衰退と結び付いた。その過程で、民俗が急激な変化にさらされ、消滅または均質化の傾向にあるという認識は地域的な差異に対する配慮を欠いたまま一般化し、変化の外在的要因としての高度経済成長の位置が確定した。

しかし、民俗学の目指すところを「人が生きる上で規範とする観念」や「そこから明らかとなる人が生きる『目的』」の解明とするのであれば、必ずしも変化の大小や有無が問題となる必要はない。たとえば、高度経済成長の好景気と、公共工事や墓石・記念碑の需要をとおして直接的に結びつけていた採石業者の経験の語りに耳を傾け、その姿を対象化すると、そこには謙虚さや利益に対する食欲さ、時代に対する遠観といった、働くことに対するさまざまな観念を見出すことができる。高度経済成長期とはまさに民俗の表出する時代である。

【キーワード】 高度経済成長、過疎化、近代化、採石業、民俗の衰退